

# 平安文学における梅の香と暗香

頼 國 文

一、はじめに

中国からの渡来植物と見られる「梅」の名は、日本の古代文献である『古事記』『日本書紀』『風土記』には登場しない。文学作品に見える古い例としては、古代漢詩集の『懷風藻』が収める葛野王の「春日翫鶯梅」があり、葛野王は天智天皇八（六六九）年から慶雲二（七〇五）年の王子である。六朝・初唐の詩風を持つ内容からみて、実際に梅の樹を見て詠んだかどうか疑問も残るといわれている。しかしながら、同じ時代の紀朝臣麻呂の「春日應詔」の詩句に「階梅鬬素蝶」（御殿のきざはしの白い梅の花は白い蝶とその白さを競い。）とある通り、「階梅」という藤原京の実景から見ると文武朝にはすでに梅が観賞の目的として貴族の庭園に植えられたのではないかと考えられる。一方、『万葉集』では、年代を知りえる梅の用例がすべて平城遷都以降である。「春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つや春日暮さむ」（巻五・八八・山上憶良）とあるように、庭の梅を詠む歌が多いことは一つの特徴として指摘できよう。

本稿は現存する日本最古の和歌集『万葉集』と最古の漢詩集『懷風藻』から、平安朝の勅撰漢詩集『凌雲集』、『文華秀麗集』、『經

国集』を経て、最初の勅撰和歌集『古今和歌集』までの奈良朝と平安朝の漢詩集、和歌集を対象として、梅の「香」の受容過程と「暗香」の美意識をたどりたいと思う。

二、梅が香

万葉集における「梅の香」の表現の歌は、万葉集卷二十、「二月に、式部大輔中臣清麿朝臣の宅にして宴せる歌十五首」の一首である。

四〇〇 梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしそ思ふ（注一）

この歌は天平宝字二年（七五八）二月式部大輔中臣清麿宅で催された宴の際に、主客の詠んだ十五首の中の一首で、作者は治部大輔市原王である。主人に対して儀礼的な挨拶の意味をこめた歌であって、「香をかぐはしみ」は主人清麿の人柄のゆかしさを象徴しており、「梅の香」への好尚とはいえないだろう。この歌に先んじて、天平十九年（七四七）二月、病床にあった大伴家持の「掾

大伴宿禰池主に贈れる悲しびの歌二首」に注意すべき歌句がある。その一首、

三六五 春の花今は盛りににはほふらむ折りて挿頭さむ手力もがも

である。小島憲之氏の見解によれば、この一首と題詞は「花の香」に触れる作品であると認められる。

その全体が、題詞（書翰）の「……身體疼痛、筋力怯軟……方今、春朝春花流霞於春苑」云々の翻訳的手法をとり、散文を歌にかえたものである。従つて、「にほふ」は題詞の「霞」即ち芳香のほふことにあたる。春の花は必ずしも梅の花をさすものではないが、花の『にほひ』に香をも含むことは注意すべきことである。（注2）

とあるように、詩の表現から、「にほふ」の意に「香」を用いるようになったのである。

『万葉集』とほぼ同時代の『懷風藻』の詩には、題詠としての梅の詩はないが、詩句として十六首の例が残る。その中に梅の香を詠む詩句は五例がある。

- 8 求友鶯鳩樹。含香花笑叢。（釋智藏「翫花鶯」）  
22 柳絮未飛蝶先舞。梅芳猶遲花早臨。（紀朝臣古麻呂「望雪」）  
38 松風韻添詠。梅花薰帶身。（田邊史百枝「春苑應詔」）  
75 芳梅含雪散。嫩柳帶風斜。（百濟公和麻呂「初春於左僕射

長王宅讌」）

82 柳條未吐綠。梅蕊已芳裾。（箭集宿禰蟲麻呂「於左僕射長王宅宴」）（注3）

始めに挙げた8の「花」は、「梅」とは断定できないが、梅を含めた花一般とみれば、上代にはかなり早くより梅の香をよんだ詩句のあることがわかる（作者は天智・持統朝頃の人、入唐僧）。『上代日本文学と中国文学 下』。22の作者の紀朝臣古麻呂と38の作者の田邊史百枝は文武朝の人と認められた。75と82は長屋王宅の宴の詩である。だから、梅の渡来と同時に、遅くとも文武朝までには「梅の香」を詠む詩句があったことがわかる。

このように、同じ時代の漢詩と和歌における「梅が香」詠の有無については、『古今集以前—詩と歌の交流—』には、

しかし万葉歌人が梅の「香」を否定し、その香を嫌ったわけではない。また同時にその香に気付かなかったわけでもない。それは「香」よりも、むしろ梅の花の「美しさ」、その色彩の美に興趣を抱く古代日本人的な感覚を主張したことによる。

これは、「梅が香」よりもその色彩の美を歌う傾向を生み、それがそのまま流行となる。しかし中国の六朝時代、特に六世紀梁代のころの詩には、梅花のつややかな美しさと共に、馥郁たるその「香」を賞美する。唐詩も同様である。この傾向は、万葉人には採用されない。むしろ七、八世紀の万葉時代に当る詩を集めたわが国最古の詩集『懷風藻』（七五一年）の詩のほうにそれが採用され、その詩の中に、万葉人の詠まな「梅が香」が新しく出現する。これは、上代の「詩」と「歌」

との差による（注4）。

と述べている。

漢詩の場合には、六朝以前（先秦詩文）の詩文に梅を詠むのは『尚書』と『詩経』のみである。

一、若作和羹、爾惟鹽梅。〔尚書〕〔說命（下）〕

二、標有梅、其實七兮、求我庶士、迨其吉兮。〔詩経〕〔召南・標有梅〕

・標有梅

三、終南何有、有條有梅。〔詩経〕〔秦風・終南〕

四、墓門有梅、有鸛萃止。〔詩経〕〔陳風・墓門〕

以上の四例のみである。しかし、これらは梅の実と木とをのみ取り上げて、梅の花を詠むのではない。梅の花を詠むことは、六朝詩から始まったと考えられている。「梅が香」を詠むのも、六朝から始まったと思われる（注5）。

『芸文類聚・菓部・梅』には、

一、詩：隋江總「梅花落」

臘月正月早驚春。衆花未發梅花新。

梅花芬芳臨玉臺。朝攀晚折還復開。

滿酌金卮催玉柱。落梅樹下宜歌舞。

金谷萬株連綺甍。梅花隱處隱嬌鶯。

二、賦：梁簡文帝「梅花賦」

梅花特早。偏能識春。或承陽而發金。

乍難雪而被銀。標半落而飛空。

香隨風而遠度。挂靡靡之遊絲。

雜霏霏之晨霧。爭樓上之落粉。奪機中之織素。（注6）

と二首の「梅が香」を詠む詩と賦がある。

梅の詩については、宋人羅大經の『鶴林玉露』卷十六の「物産不常」には、

書曰。若作和羹。爾惟鹽梅。詩曰。標有梅。其實七兮。又曰。終南何有。有條有梅。（中略）蓋但取其實與材而已。未嘗及其花也。至六朝詩。乃略有詠之者。及唐而吟詠滋多。至宋朝。則詩與歌詞。連篇累牘。推為群芳之首。至恨離騷集衆香草而不應遺梅。余觀三百五篇。如桃李芍藥棠棣蘭之類。無不歌詠。如梅之清香玉色。迥出桃李之上。豈獨取其材與實。而遺其花哉。或者古之梅花。其色香之奇。未必如後世。亦未可知也。蓋天地之氣。騰降變易。不常其所。而物亦隨之。故或昔有而今無。或昔無而今有。或昔庸凡而今瑰異。或昔瑰異而今庸凡。要皆難下以一定言上。云々

とある。宇佐美喜三八氏は、この文章をもととして、

羅大經のこの言葉によれば、唐土において梅花の薫りが詩材として盛行するに至ったのは宋の時代になってからであって、わが古今集時代よりは後の時代のことに属する。従って、『古今集』の梅の歌に花の香を詠む傾向が強くなるに至った

現象につき、漢詩からの影響を一条件として想定するのは恐らく不当であろう。(注7)

というように、「平安初期におけるわが梅の香の詩は、唐代の詩の模倣ではなく―梅の香をよむことは宋代以降であるために―、平安人の当時の生活における実感に基づいた美意識によるもの」と云う。」と立論したが、小島憲之氏は六朝詩の詩例を挙げて宋の羅大經の文章を反駁して、「梅の香」を詠むことは、中国文学の影響であることを立論した。

しかも、万葉集の歌に確実な例が一例のみ残るのは、これはやはり官人の万葉歌詠圈の問題であり、これは万葉人の梅の香に対する不感性をさすものではない。心解けて飲む酒宴の席に梅の香を詠むことは、たとえ一首であつても、その後には香の愛好を示す事実が察知される。懷風藻の詩の表現は六朝初唐の詩によるところが多い。梅の姿態、その香など皆その例である。ここに上代人の梅の香に対する美意識は、自己の抱くもののほかに、更に異国文学によつて新しく表現の上に触発されたものと認められる。(注8)

以上のように、小島憲之氏は六朝詩と初唐詩における「梅が香」を詠む漢詩の例を『芸文類聚』の二例を含んで、以下のように挙げてゐる。

六朝詩：

一、窓梅朝始發、庭雪晚初消。道遠終難寄、馨香徒自饒。(梁

・庾肩吾「同蕭左丞詠摘梅花」)

二、日影桃蹊色、風吹梅逕香。(陳・顧野王)

三、早梅香野徑、清澗響丘琴。(隋・王由禮)

四、香清寒艷好、誰惜是天真。(隋・侯夫人)

樂府詩(樂府詩集二四、梅花落)

五、金砌落芳梅、飄零上鳳臺。…映日光光動、迎風香氣來。(陳

・後主)

六、遠落香風急、飛多花逕深。(陳・張正見)

七、祇言花是雪、不悟有香來。(陳・蘇子卿)

八、縹色動風香、羅生枝已長。…轉袖花紛落、春衣共有芳。(隋

・江總)

九、可憐香氣歇、可惜風相摧。(隋・江總)

『玉台新詠』

十、日照蒲心暖、風吹梅蕊香。(卷七、梁・簡文帝「從頓顗還城」)

十一、草短猶通屨、梅香漸着人。(卷八、梁・徐君蒨「初春攜內人行戲」)

十二、階上香入懷、庭中花照眼。(卷十、梁・武帝「春歌三首」)

「このように考察を続けてゆくと、宋人羅大經の梅が香に対する説は、梅についての一般論であり、細部に互つては、修正を要するのであろう。」と小島憲之氏は結論した。

さらに、『全唐詩』から題詠としての梅の詩の中に「梅の香」を詠む例を探し出してみよう(注9)。

- 一、夕逐新春管、香迎小歲杯。(卷十八、沈佺期、「梅花落」)
- 二、馨香雖尚爾、飄蕩復誰知。(卷四八、張九齡、「庭梅詠」)
- 三、影隨朝日遠、香逐便風來。(卷五十、楊炯、「梅花落」)
- 四、雪含朝暝色、風引去來香。(卷六十、李嶠、「梅」)
- 五、花落彈棋處、香來薦枕前。(卷一一八、孫逖、「和常州崔使君詠後庭梅」)
- 六、白石盤盤磴、清香樹樹梅。(卷二六七、顧況、「梅灣」)
- 七、誰令香滿座、獨使淨無塵。(卷三四三、韓愈、「春雪間早梅」)
- 八、朔風飄夜香、繁霜滋曉白。(卷三五三、柳宗元、「早梅」)
- 九、蹋隨遊騎心長惜、折贈佳人手亦香。(卷四四六、白居易、「憶杭州梅花因敘舊遊寄蕭協律」)
- 一〇、雪映綠巖竹、香侵泛水蕊。(卷四七五、李德裕、「憶寒梅」)
- 二、委素飄香照新月、橋邊一樹傷離別。(卷四八一、李紳、「早梅橋」)
- 三、欲托清香傳遠信、一枝無計奈愁何。(卷四九一、王初、「梅花」)
- 三、艷寒宜雨露、香冷隔塵埃。(卷五一五、朱慶餘、「早梅」)
- 四、素艷雪凝樹、清香風滿枝。(卷五二九、許渾、「聞薛先輩陪大夫看早梅因寄」)
- 五、惹袖尚餘香半日、向人如訴雨多時。(卷五六七、崔櫓、「岸梅」)
- 六、餘香低惹袖、墮蕊逐流杯。(卷五九七、溫庭皓、「梅」)
- 七、枝枝倚檻照池水、粉薄香殘恨不勝。(卷六四二、來鵠、「梅花」)

- 八、凍香飄處宜春早、素艷開時混月明。(卷六五四、羅鄴、「早梅」)
- 六、愁憐粉艷飄歌席、靜愛寒香撲酒樽。(卷六五七、羅隱、「梅花」)
- 二、長途酒醒臘春寒、嫩蕊香英撲馬鞍。(卷六六五、羅隱、「人日新安道中見梅花」)
- 三、玉人下瑤臺、香風動輕素。(卷六七一、唐彥謙、「梅」)
- 三、素艷照尊桃莫比、孤香黏袖李須饒。(卷六七七、鄭谷、「梅」)
- 三、寒步江村折得梅、孤香不肯待春催。(卷六七七、鄭谷、「折得梅」)
- 四、凍白雪為伴、寒香風是媒。(卷六八〇、韓偓、「早玩雪梅有懷親屬」)
- 五、風雖強暴翻添思、雪欲侵凌更助香。(卷六八〇、韓偓、「梅花」)
- 六、玉為通體依稀見、香號返魂容易回。(卷六八〇、韓偓、「湖南梅花一冬再發偶題於花援」)
- 七、清香無以敵寒梅、可愛他鄉獨看來。(卷六八五、吳融、「旅館梅花」)
- 六、凍蕊凝香色艷新、小山深塢伴幽人。(卷六八九、陸希聲、「梅花塢」)
- 六、香中別有韻、清極不知寒。(卷七一四、崔道融、「梅花」)
- 三、清芳一夜月通白、先脫寒衣送酒家。(卷七一四、崔道融、「對早梅寄友人」)
- 三、仙中姑射接瑤姬、成陣清香擁路岐。(卷七六五、王周、「大石嶺驛梅花」)
- 三、蕊香霏紫陌、枝亞拂春苔。(卷七八二、鄭述誠、「華林園」)

早梅)

三、風遞幽香去、禽規素艷來。(卷八四三、釋齊己、「早梅」)

『全唐詩』の中には、梅を詠む詩は七十余首あるが、その中で「梅が香」を詠む詩は三十三例あり、半数に近い。さらに、『古今圖書集成』には、

唐人詠牡丹花詩共九〇首、作者四十四人。詠梅花詩四十四首、作者三十五人。

宋代詠牡丹詩七十四首、作者二十九人。詠梅花詩一八三首、作者五十三人。

とある。羅大經説の「及唐而吟詠滋多。至宋朝。則詩與歌詞。連篇累牘。推為群芳之首。」が正しいと思われるが、余觀三百五篇。如桃李芍藥棠棣蘭之類。無不歌詠。如梅之清香玉色。迥出桃李之上。豈獨取其材與實。而遺其花哉。という一句は六朝以前のこと、「三百五篇」即ち「詩經」を指すはずである。以上の統計資料によると、六朝と唐の時代において「梅が香」を詠むことが多くなる。宋に至ると、「梅が香」は文学作品のなかで特別の地位を占める。宋の時代には、梅を詠む詩が中国歴代の中で最も多いと認められる。梅を「国士」、「梅が香」を「国香」と詠む(注10)。さらに、千古の絶唱と評する「疏影橫斜水清淺。暗香浮動月黃昏。」という林和靖の「山園小梅」の詩は宋代になつて作られた。

『全唐詩』によると、牡丹を詠むのは百余首で、一位である。梅を詠むのは七十余首ある。『全宋詞』によると、一位は梅で、四

百四十余首ある。牡丹は六十余首である。羅大經の説の「至宋朝。則詩與歌詞。連篇累牘。推為群芳之首。」というのはこのことを指すのだろう。宇佐美喜三八氏はこのことばを「宋朝に至ると、詩や歌詞に梅花の香を『群芳之首』と推して詠んだものが極めて夥しく現われた。」と解説したことは誤りであろう。「群芳之首」の「芳」ということはここに「香」を指すのではなく、「花」を指すと思われる。

宇佐美喜三八氏が、「羅大經のこの言葉によれば、唐土において梅花の薫りが詩材として盛行するに至ったのは宋の時代になつてからであつて、わが古今集時代よりは後の時代のことになる。」と論じていることは誤解であるだろう。

三、勅撰三大集における「梅が香」

平安時代に入つて現れた最初の勅撰詩集『凌雲集』には「梅」の字の見られる漢詩が六首あつて、その中で梅が香の詠まれているのは、多治比貞清の「奉和御製春朝雨晴」と題した詩の句の中に、

86 雨晴宸眺遠。雲罷彼蒼坡。

朝露懸餘滴。殘虹卷半規。

梅香深淺度。柳色短長垂。

氛氳從斯沒。翹心就堯曦。(注11)

と見える一箇所だけである。「柳色」に対して「梅香」とあるのは、梅の特色として香の選ばれた点が注意された。

次の勅撰詩集『文華秀麗集』では、梅に関して詠まれた句のある詩は七首見られる。『凌雲集』の場合と異なり、香りを詠んだものが多い。まず巻上の「遊覧」にある淳和天皇（当時は皇太子）の詩「春日侍嵯峨山院」には次のような句がある。

3 嵯峨之院埃塵外。乍到幽情興偏催。

鳥囀遙聞綠塔墜。花香近得抱窓梅。

攢松嶺上風為雨。絕澗流中石作雷。

地勢幽深光易暮。變興且待莫東廻。

窓と梅とを取り合わせた最古の例である。和歌で梅と窓とを取り合わせるのは、長承三年（一一三四）頃成立の『為忠家初度百首』に、「窓前梅」の題で、

匂ひくる砌の梅の開くれば窓をも閉ぢず春の夜な夜な（三四、

藤原為忠）

とあるのが最古と言われる（注12）。中国文学には、六朝梁・庾肩吾「同蕭左丞詠摘梅花」の「窓梅朝始發、庭雪晚初消。道遠終難寄、馨香徒自饒。」と、初唐・楊炯「梅花落」の「窓外一株梅、寒花五出開。影隨朝日遠、香逐便風來。」などがある。

淳和天皇には次の作もある。

臥中簡毛學士

29 今年有潤春猶冷。不解韶光着砌梅。

風夜忽聞窓外韻。臥中想得滿枝開。

この一首の「風夜忽聞窓外韻。臥中想得滿枝開。」について日本古典文学大系『懷風藻』には、「風の吹く夜ゆくりなくも窓の外

の芳香をかいで、枝いっぱい梅の花が咲き満ちていることを寢床の中で想像したわけである。」という注釈がある。淳和天皇は弘仁元年（八一〇）九月に皇太弟となり、同十四年（八二四）四月即位。私見によると、この一首こそ平安文学史上において梅の「暗香」の美意識の萌芽ではないかと思われる。

『文華秀麗集』巻中の「楽府」に嵯峨天皇の御製「梅花落」が一首ある。

67 鷓鴣梅院暖。花落舞春風。

歷亂飄鋪地。徘徊颺滿空。

狂香燼枕席。散影度房櫳。

欲驗傷離苦。應聞羌笛中。

風に翻り乱れ散る梅花を扱い、「狂香」という語でその芳烈な香りが表されている。この御製の次に見える菅原清公の「奉和梅花落」と題した詩には、左のような句がある。

68 春風吹物暖。朝夕蕩庭梅。

花點紅羅帳。香縈玉鏡臺。

榆關消息斷。蘭戶歲年催。

未度征人意。空勞錦字廻。

梅花の散ることを主題として詠み、やはり花の香に関しても一

句を費やしている。

巻下の「雑詠」に「和野内史留後看殿前梅之作」と題して見える桑原腹赤の詩、

131 夙分爲宮樹。開榮不畏寒。

向南仙杖從。臨北綵花殘。

待蝶香猶富。藏鶯影未寬。

雖知先衆木。猶恨後天看。

とある。「殿前」とだけで、どの殿舎か分からないが、あるいは紫宸殿であろうか。次の一首は「夏日賦雨裏梅」と題した皇太子（後の淳和天皇）の令製で、これは梅が香ではなく梅の実を詠んだ詩である。

第三の勅撰詩集『經国集』は、現在では全二十巻のうちの六巻だけが伝わり、その中の一卷は文集である。残る五巻に「梅」の字のある詩は二十七首あって、「梅」の字を含んだ題の詩が十二首を占めている。まず巻十には、「梅花引」（「引」はうたの意）の題で小野岑守の作、

27 水精窗外一株梅。擬納芬芳壓砌栽。

地近恩煦花早發。君王帳裏香風來。（注13）

と宮廷の梅花を詠み、窓を取り合わせる。

巻十一の「雑詠」の初めには梅を詠んだ詩が並んでいて、それらの中にある平城天皇（東宮時代）の詩三首と高村田使の「奉和殿前梅花」一首と和氣広世の「奉和落梅花」一首には、いずれ

も梅を詠んで香に及んだ句が見られる。

80 詠殿前梅花

仲春雖少暖。梅樹向驚時。  
發艷將桃亂。傳芳與桂欺。  
可攀猶可折。堪寄亦堪貽。  
儻有鹽羹過。能無致味滋。

81 奉和殿前梅花

忽見三春木。芳花一種催。  
素葩承日咲。黃蕊對風開。  
舞蝶飛更聚。歌鶯去且來。  
和羹如可適。以此作鹽梅。

82 落梅花

二月云過半。梅花始正飛。  
飄颻投暮牖。散亂拂晨扉。  
萼盡陰初薄。英疎馥稍微。  
再陽猶未聽。誰為恡芳菲。

84 奉和落梅花

凌寒朱早發。競暖素初飛。  
送吹香投牖。迎光影拂扉。  
藥疎實漸見。葉細蔭猶微。  
願遇重陽日。承暉擅芳霏。



庭梅競艷色。朝暮正芳菲。

可惜春風下。落花一亂飛。(注14)

「詠殿前梅花」の詩題の出現は、平安朝の独特の風雅を作り出したと思われる。「殿前」は、御殿の前面の意、ここは東宮平城の御殿の前庭をさす。漢詩の中に、初唐王建「宮中三臺二首」の「池北池南草綠、殿前殿後花紅。」(『全唐詩』卷二六「雜曲歌辭」と崔日用「奉和立春遊苑迎春應制」の「剪綺裁紅妙春色、宮梅殿柳識天情。」(『全唐詩』卷四六)などの例があるが、「殿前梅花」を詠む漢詩はないと思われる(注15)。

同じく卷十一にある嵯峨上皇の御製一首、

# 101 閑庭早梅

庭前獨有早花梅。上月風和滿樹開。

純素不嫌幽院寂。濃香偏是犯窓來。

纖纖枯幹知初暖。片片寒葩委舊苔。

自恨無因佳麗折。徒然老大野人栽。

とあつて、窓から流れ込む梅の濃香が詠まれている。

紅梅が詩題として詠まれるのは、勅撰詩集には一首のみであり、

卷十一、「七言賜看紅梅探得爭字應令一首。紀長江」、

# 136

二月寒除春欲暖。揺山花樹梅先驚。

即今紅藥滿枝發。仙覽褰簾感興情。

香雜羅衣猶可誤。光添粧臉遂應爭。

儼因委質瑤階側。朝夕徒仰少陽明。

の詩である。「香雜羅衣猶可誤」というのは、紅梅の香がうすものの香と混在し、どちらの香やらわからない状態を述べたもの。平安貴族の生活の中で香を用いることが多くなったことともかわるのであろう。

右によつて知られるように、平安時代に入ると梅花の詩で香の芳しさを詠んだ句を持つ作品がしばしば現れるに至っている。当時の平安朝の詩は六朝や唐代の詩を模範として詠まれていたが、「詠殿前梅花」、「詠庭梅」、「閑庭早梅」、「賜看紅梅」という詩題も現れた。渡来植物の梅は、平安朝に至つて、ようやく宮廷行事の枠内に定着することになったといえるだろう。

# 四、暗香

『万葉集』には、夜の梅を読んだ歌が八首ある。卷三の「譬喻歌」に、

大宰大監大伴宿禰百代の梅の歌一首

三九二 ぬばたまのその夜の梅をた忘れて折らず来にけり思ひし

ものを

とある。これは、新日本古典文学大系『万葉集』に、「大伴宿禰百代は、天平二年(七三〇)の梅花の宴に連なつて、梅花の歌を作つた一人である(巻五・八三)。「その夜」とは、その天平二年の宴か、あるいは年毎に開かれたであろう梅花の宴の夜を指すのであ

ろう。」という注釈がある。

卷十の「春の雑歌」に、

一八三 何時しかもこの夜の明けむ鶯の木伝ひ散らす梅の花見  
む

とある。暗い夜には梅が見えない、いつになったら夜が明けるのかというもの。

卷八の「春の雑歌」に、

紀女郎の歌一首 名を小鹿と曰へり

一四三 闇夜ならば宜も来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまさ  
じとや

とある。これと（卷八・一六六）とは同じ作者の詠。月が清く明るいので、その下の梅を見に来いというのであろう。月夜の梅を詠んだものは他に四首、いずれも月光の下の梅の美しさを詠んでいる。

卷一八の同伴家持の歌日記に、

宴席に雪、月、梅の花を詠める歌一首

四三四 雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき兒も  
かも

とある。中西進『万葉集』に、「雪月花の美意識の最初。中国のそれと平行的で白詩の影響ではない。」という注釈がある。

月下の梅を詠んだ例は、『懷風藻』と勅撰三大集には見えないが、『菅家文草』の冒頭には、菅原道真十一歳の時の作「月夜見梅花」が載る。

1 月耀如晴雪。梅花似照星。

可憐金鏡轉。庭上玉房馨。（注16）

月夜の梅花を詠んでいる。また卷五には、

376 翫梅花、應製。

隨處有梅惣可憐。不如獨立月明前。

香風豈啻花吹出。半是清涼殿裏煙。

という清涼殿での月前の梅花を詠んだ作もある。

中国文学で月夜に梅という詩を検索すると、

月影凝流水、春風含夜梅。（『全隋詩』卷一、煬帝「正月十五

日于通衢建燈升南樓」）

という例を見出した。しかし、その例は稀で、川口久雄『菅家文草・菅家後集』（日本古典文学大系）の補注に、「中国において、月と梅とをとりあわせる趣味、月夜に梅花を見るという好尚は、六朝詩にはないようで、……」とあるとおりである。  
さらに『全唐詩』を検索すると、

一、『全唐詩』卷六九、閻朝隱「明月歌」、

梅花雪白柳葉黃、雲霧四起月蒼蒼。

箭水冷冷刻漏長。揮玉指、拂羅裳、為君一奏楚月光。

二、『全唐詩』卷一八、孫逖「和常州崔使君寒食夜」、

聞道清明近、春庭向夕闌。行游昼不厭、風物夜宜看。

斗柄更初轉、梅香暗裏殘。無勞秉華燭、清月在南端。

三、『全唐詩』卷四〇一、元稹「春月」、

春月雖至明、終有靄靄光。……風柳結柔援、露梅飄暗香。

四、『全唐詩』卷七一四、崔道融「梅」、

溪上寒梅初滿枝、夜來霜月透芳菲。

清光寂寞思無盡、應待琴尊與解圍。

などがあるが、やはり例はさほど多くないことは明らかである。

『古今集』の梅の歌では、巻一「春歌上」の十七首中、十三首が梅の香を詠んでいる。巻六の「冬歌」の中にも一首、梅の香を詠んでいる。

暗部山にて、よめる

貫之

39 梅花にほふ春べはくらふ山やみに越ゆれど著くぞありける

月夜に、梅花を折りてと、人の言ひければ、折るとて、よめる 躬恒

40 月夜にはそれとも見えず梅花香をたづねてぞしるべかりける

春の夜、梅の花を、よめる

41 春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見えぬ香やはかくるゝ

(注17)

これらは延喜時代の巨匠たちの歌で、梅についてもつばら香を取り上げている。色よりも香を詠むことが当時の梅花の歌の新風であったのだらうと思われる。この三首はいずれも夜の梅が香を詠んだ歌で、第一首と第三首とは漢詩の「暗香」の趣を詠んだものと知られる。この「暗香」は、平安歌人によって初めて取り上げられた。万葉人は月夜に咲く梅を詠んでも、この暗香は詠んでいない。「梅が香」を詠むことは、六朝以来例は甚だ多い。しかしそれは一般に昼間の芳香であって、夜の芳香は殆んど登場しない。小島憲之氏によれば、夜の芳香を詠むのは、中唐に入つて白氏文学集団(注18)の影響を受けた結果である(注19)。

小島憲之氏の挙げた元稹と白居易の詩は八例ある。

元稹の例：

一、『全唐詩』卷三九六、「桐花」、

臘月上山館、紫桐垂好陰。可惜暗澹色、無人知此心。……

滿院青苔地、一樹蓮花響。自開還自落、暗芳終暗沈。

二、『全唐詩』卷四〇一、「三月二十四日宿曾峯館夜對桐花寄樂天」、

微月照桐花、月微花漠漠。怨澹不勝情、低回拂窗幕

葉新陰影細、露重枝條弱。夜久春恨多、風清暗香薄。……

三、『全唐詩』卷四〇一、「春月」、

春月雖至明、終有靄靄光。不似秋冬色、逼人寒帶霜。

纖粉澹虛壁、輕煙籠簾半床。……風柳結柔援、露梅飄暗香。

四、『全唐詩』卷四二二、「雜憶五首」其の一、

今年寒食月無光、夜色才侵已上床。

憶得雙文通內里、玉璫深處暗聞香。

- 五、『全唐詩』卷四二二、「雜憶五首」其三、  
寒輕夜淺繞回廊、不辨花叢暗辨香。  
憶得雙文臘月下、小樓前後捉迷藏。

白居易の例：

- 六、『全唐詩』卷四二五「答桐花」、  
山木多蓊鬱、茲桐獨亭亭。葉重碧雲片、花簇紫霞英。  
是時三月天、春暖山雨晴。夜色向月淺、暗香隨風輕。…  
七、『全唐詩』卷四三二「寄元九」、

月夜與花時、少逢盃酒樂。…蕙風晚香盡、槐雨餘花落。  
秋意一蕭條、離容兩寂寞。況隨白日老、共負青山約。…

- 八、『全唐詩』卷四四二「春夜宿直」、  
三月十四夜、西垣東北廊。碧梧葉重疊、紅藥樹低昂。  
月砌漏幽影、風簾飄闇香。禁中無宿客、誰伴紫微郎。

ほかに中唐詩人の詩は、

- 九、『全唐詩』卷三三三、柳宗元「早梅」、

早梅發高樹、迴映楚天碧。朔風飄夜香、繁霜滋曉白。  
欲為萬里贈、杳杳山水隔。寒英坐銷落、何用慰遠客。

などがある。

夜の花の香は、平安当時の漢詩にも採用される。『古今集』以前には、寛平元年（八八九）重陽節の詩宴の応製詩題「惜秋翫殘菊」、『群書類從』卷一三四所収）の詩群の中の、

- 一、一叢寒菊咲千金。夜翫殘榮秋欲深。  
月桂混香依檻外。燈花和色隔紗陰。（島田忠臣）

- 二、九月秋將盡。天臨翫菊芳。

色和庭上燎。香混閣中藝。（橘公緒）

- 三、三秋已盡變冬律。殘菊承霜一兩莖。

香獨先梅飛曉月。色同白雪夕燈清。（源湛）

などの例が挙げられていた。小島憲之氏は、

この月の夜や闇夜に匂う花の香は九世紀承和期以来の平安人の詩心を煽る。上代の詩、或は漢風讚美時代の詩に、花の芳香を詠みはするものの、未だ夜の花の芳香が出現しなかったのは、中唐詩人元・白の詩に原因がある（注20）。

と結論づけた。しかしながら、勅撰三大漢詩集の「梅」を詠む詩句を検討すると、淳和天皇の「風夜忽聞窓外韻。臥中想得滿枝開。」という一句から、梅の「暗香」への賞美を嗅ぐことができるだろう。

『本朝文粹』卷第十の「春日陪第七親王書齋同賦梅近夜香多応教橘正通」に、

古詩曰、梅近夜香多。誠哉此語。夫梅之為花也、不能不近栽、香之迎夜也、可憐可相賞。是我王喚管弦於其前、憶旧曲而對飄落、命詩酒於其下、催新感而望芬敷。（注21）

と、夜の梅の香りを述べる。この一首は橘正通の村上天皇の第七皇子具平親王の邸での作である。ここの「古詩」というのは、前に述べたとおり、中国文学には夜の梅を詠んだ作は少ないことからすれば、むしろ日本人の作かと思われる。

## 五、おわりに

平安時代の勅撰三大漢詩集——『凌雲集』・『文華秀麗集』・『経国集』——は六朝以来中唐までの中国漢籍の影響が見える。平安初期は、小島憲之氏のいうように、「漢風謳歌時代」であるが、この漢風讃美時代は、年表的に言えば、嵯峨天皇の弘仁元年（八一〇）より淳和天皇の天長十年（八三三）に至るわずか二〇数年の文学期に過ぎないといわれる（注22）。桓武・平城朝はこの漢風讃美時代の先駆に当たる部分である（注23）。『詠殿前梅花』（平城天皇）の詩題の出現は平安朝の独特の風雅を作り出したと思われる。詩宴の中で、さかづきをあげて梅の花を賞美しながら、梅の漢詩を詠ずることは、大陸の文人の風流に倣った平安朝貴族の文雅な催しであったと考えられる。一方、「花香近得抱窓梅」（淳和天皇）、「風夜忽聞窓外韻。臥中想得滿枝開。」（同）、「狂香燠枕席」（嵯峨天皇）、「濃香偏是犯窓來」（同）などの詩句に拠ると、平安京の内裏には、あちこちに梅があつたようである。梅の「暗香」の好尚は、漢詩文の触発によると同時に、生活における実感に基づいた美意識にもよるのではないだろうか。

## 注

- (1) 歌番・本文は、中西進『万葉集 全訳注・原文付』（講談社）に拠る。以下同じ。
- (2) 小島憲之『上代日本文学与中国文学 下』（塙書房）第六篇第一章「懷風藻の詩」。
- (3) 詩番・本文は、日本古典文学大系『懷風藻・文華秀麗集・本朝文粹』（岩波書店）に拠る。以下同じ。
- (4) 小島憲之『古今集以前——詩と歌の交流——』、塙書房、一九七六年。
- (5) 黄永武『詩與美』（台湾・洪範書店、一九八四年）の「梅花精神的歷史淵源」には、「梅花受到歌詠禮讚、在現存的詠物詩篇中、到六朝時才見到。」とある。
- (6) 『藝文類聚』（香港中華書局）第八十六卷、菓部上「梅」に拠る。
- (7) 宇佐美喜三八「梅が香——古今集の梅花の歌に関して——」（『語文』第二十四輯、大阪大学国文学研究室編、一九六一年八月）。
- (8) 注2前掲書。
- (9) 『全唐詩』（北京中華書局）に拠る。以下同じ。
- (10) 宋の時代の詩に、梅を「国土」・「国香」を詠む例が見られる。
  - 「國香和雨入青苔」（蘇軾「再和楊公濟梅花」）
  - 「天香國艷肯相顧」（蘇軾「松風亭下梅花盛開再用前韻」）
  - 「天向梅梢別出奇、國香未許世人知。」（楊萬里「臘梅」）
  - 「坐收國土無雙價」（陸游「射的山觀梅」）
  - 「吾國名花天下知」（陸游「賞梅花至湖上」）
- (11) 詩番・本文は、小島憲之『国風暗黒時代の文学 中（中）』（塙書房）に拠る。
- (12) 小林祥次郎「梅史（二）——平安漢詩文——」（群馬県立女子大学

『国文学研究』第二十号、二〇〇〇年三月。

- (13) 詩番・本文は、『国風暗黒時代の文学 中(下)Ⅱ』(塙書房)に拠る。

- (14) 詩番・本文は、『国風暗黒時代の文学 下Ⅰ』(塙書房)に拠る。以下同じ。

- (15) 拙稿「平安文学における紅梅のイメージ」参照。(『万葉集と東アジア』第一号、国学院大学大学院万葉集と東アジア研究会編、二〇〇六年三月)。

- (16) 詩番・本文は、日本古典文学大系『菅家文草・菅家後集』(岩波書店)に拠る。以下同じ。

- (17) 歌番・本文は、新日本古典文学大系『古今和歌集』(岩波書店)に拠る。

- (18) 白氏文学集団というのは、白居易・元稹・劉禹錫三人を指す。

- (19) 注4前掲書。

- (20) 小島憲之「古今集への道―「白詩園文学」の誕生―」(『文学』第四十三卷第八号、岩波書店、一九七五年八月)。

- (21) 本文は、新日本古典文学大系『本朝文粹』(岩波書店)に拠る。

- (22) 注20前掲論文。

- (23) 小島憲之「桓武朝の文学」(『文学』第三十五卷第七号、岩波書店、一九六七年七月)、「平城朝の文学」(『文学』第三十五卷第八号、岩波書店、一九六七年八月)。

(らい・こくぶん／台湾・致遠管理学院)